

加藤秀俊・熊倉功夫編

外国語になつた 日本語の事典

岩波書店

加藤秀俊・熊倉功夫編

外国語になつた 日本語の事典



岩波書店

ヨーロッパ文化と日本文化

ルイス・フロイス著
岡田章雄訳注

岩波文庫
本体四〇〇円

一外交官の見た明治維新(全二冊)

アーネスト・サトウ著
坂田精一訳

岩波文庫
本体各六六〇円

武士道

新渡戸稲造著
矢内原忠雄訳

岩波文庫
本体三六〇円

茶の本

岡倉覚三著
村岡博訳

岩波文庫
本体三〇〇円

邦訳日葡辞書

土井忠生・森田
武・長南実編訳

B5判904頁+索引308頁
本体二八、一五六円

岩波書店刊

定価は表示価格に消費税が加算されます

1999年7月現在

はじめに

「国際化」の進展にともなって、世界のさまざまな国や文化は相互にはげしく接触し、交流し、そして混合しはじめている。経済の領域では世界貿易がおどろくべき規模で拡大し、また、多国籍企業が国境をこえて活動しているし、国際大量輸送機関の整備によって、いま世界では年間五億人以上のひとびとが外国旅行を経験している。こんなにも大量の物資や商品、そして人間が地球上をうごきまわった時代は人類史上、はじめての事態といふべきであろう。

われわれがコミュニケーションの手段として使用している言語もその例外ではない。現在、世界には少数言語をもふくめて、合計すくなくとも三千の言語があると推定されているが、そのなかでつよい「言語力」をもった英語などは世界を席巻し、さまざまな言語をむすぶ「媒介語」として定着してしまった。とりわけネットワーク上での言語は、プログラム言語からコマンドにいたるまで英語を必要とする。そして日常の言語生活のなかでも、英語をはじめとする主要言語のなかから、すくなくならぬ数の語彙が他言語のなかにとりいれられるようになった。そのことは現代の日本語のなかにおびただしく流入してきた「外来語」、とくにいわゆる「カタカナことば」の数をみるだけでもあきらかだ。

そのような世界の言語環境のなかで「日本語」をかんがえてみると、日本語もまた諸外国の辞典や日常用語のなかに、かなりたくさん「外来語」として登録されていることに気がつく。日本に入れた外国語にくらべれば、日本から流出した語彙の数ははるかにすくないけれども、さまざまな事物の国際交流の結果として、日本語は単語レベルではかなり世界のあちこちで耳にするようになった。そのなかから五〇語をえらんで、これらの語彙の来歴と、どのような事情から外国へ「輸出」され、どのように使用されているのかをしらべてみよう、というのがこの書物の目的である。

とはいっても、しらべればしらべるほど、外国に流出した日本語の歴史はふるい、ということにあらためて気がつく。本書の内容からすぐにわかるように、かなりの数の語彙は一六世紀に日本からヨーロッパに紹介された。よくしられているように『日葡辞書』にはすでに三万をこえる日本語がポルトガル語に翻訳されており、そのいくつかはその当時から、かぎられた範囲ではあったが西洋の語彙のなかに取りこまれた。日本もまた、この時代に西洋の語彙をいくつも輸入した。現在にいたるまで健在なものとして、「かるた」「らしや」「ぶらんこ」「かすてら」などがあることはいうまでもあるまい。この時代に日本語と西洋の言語とのさいしよの交流がはじまった、というべきなのであろう。

そうした東西文化の交流のあと、日本は鎖国の時期にはいったが、明治の「開国」と同時に、ふたたび言語の交流がはじまる。日本では福沢諭吉をはじめとする啓蒙思想家たちが西洋の語彙を紹介したが、それと並行して日本の語彙がふたたび西洋に流出した。本書のなかでしばしば引用され

ているチェンバレンの『日本事物誌』などが果たした役割もおおきかったが、なによりも一九世紀末期の「ジャポニスム」が西洋から東洋への関心を加速したのであった。もしも一六世紀に流出した語彙が基層部分であるとするなら、一九世紀のこれらの語彙はそれにかさなる第二層といってさしつかえあるまい。

そして、さらにそれから半世紀が経過して、こんどは戦後期がやってくる。ここでも、われわれはおどろくほどたくさん外国語、とくにアメリカ英語を輸入したが、同時に日本語の「海外進出」も活発になった。自動車や家電製品の輸出がさかんになるにつれて、いくつもの日本企業名が外国の辞書に登録されるようになったが、なによりも映画やアニメのようなメディアをつうじて、さまざまな日本語が世界で通用するようになる。現在、『小学館ランダムハウス英和大辞典』の付録「日本語から借用された英語」に掲載されている「日本語」の語彙はおよそ九五〇語。「外国語になった日本語」の数はさらに増加しつつあるとおもわれる。

もちろん、こうした語彙の流出、流入の過程では、その語によって意味されるものはしばしば換骨奪胎であって、「原語」と「訳語」とのあいだには、ときには滑稽ともいえるべき意味の落差が生じているが、それはあえてここで問うところではない。だいじなのは、われわれ日本人が気づかぬうちに、こんなにおおくの「日本語」が世界各地でつかわれるようになってきたという事実なのである。

折しも国立国語研究所の「世界言語センサス」(一九九九年では日本語が英語、フランス語につい

で世界で重要とおもわれる言語の第三位とされていることがあきらかにされ、また国際交流基金が全世界規模でおこなった日本語教育機関調査では一九九八年現在、正規の教育機関で日本語を学習しているひとびとの数は二百万人をこえたことも報告されている。それだけ「日本語」が世界のなかで自然に市民権をえたこんにち、われわれがふだんつかっているいくつかの語彙の背景をあらためて学んでおくこともだいじであろう。この書物が日本語をみつめなおすための手がかりになるならさいわいである。

この書物の編纂が可能であったのは、ひとえに困難な作業を短い文章でまとめたいただいた執筆者各位のご理解とご協力によるものであった。またイタリア語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語の主要辞典を丹念に検索していただいた神田外語大学の石井米雄学長をはじめ同大学の教員各位にふかくお礼を申しあげなければならない。さいごになるが、岩波書店の大塚信一社長、編集部の高村幸治、吉村弘樹の両氏にはお世話になった。うれしいことであった。

一九九九年五月

加藤 秀俊
熊倉 功夫

目

次

●外国語になった日本語の事典

歌舞伎 かぶき	温泉 おんせん	沖縄 おきなわ	漆 うるし	浮世絵 うきよえ	生花 いけばな	アイヌ	はじめに
.....							
30	25	21	16	11	6	1	

酒 さけ	交番 こうばん	碁 ご	系列 けいれつ	芸者 げいしや	黒潮 くろしほ	銀杏 ぎんぎょう	着物 きもの	カラオケ
.....								
75	70	65	60	55	50	45	40	35

鋤焼 すきやき	人力車 じんりきしゃ	醬油 しょうゆ	障子 しょうじ	将軍 しょうぐん	柔道 じゅうどう	渋い	指圧 ししあつ	侍 さむらい
.....								
121	115	111	106	100	95	90	85	80

目 次

長 なが	豆 とう	津 つ	茶 ちや の湯 ゆ	畳 たたみ	大 だい 名 みょう	禅 ぜん	相 す 撲 も	寿 す 司 し
崎 さき	腐 ふ	波 なみ						
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
166	162	156	151	146	141	136	131	126

弁 べん	蒲 か	武 ぶ 士 し 道 どう	腹 はら 切 き り	俳 はい 句 く	能 のう	根 ね	忍 にん	二 に
当 とう	団 だん					付 つけ	者 じゃ	世 せい
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
213	208	203	198	192	186	180	176	171

ラ ー メ ン	楽 らく	や く ざ	御 み 門 かど	漫 まん 画 が	盆 ぼん 栽 さい	坊 ぼう 主 ず
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
253	247	240	235	230	225	218

裝丁「中野達彦

アイヌ【Ainu】

この人びとの存在がヨーロッパ人の知るところとなったのは、一六世紀の中葉、宣教師たちの報告によってであるとされる。ランチロットの報告がもつとも早いとされるが、より具体的な内容をもなったものはルイス・フロイスのそれで一五六五年二月二〇日の日付けをもっている。それには、日本国の北方には蕃人たちの大きな国があり、かれらは動物の毛皮を着て、毛が全身に生じ、ヒゲが長いなどと記したのち、ゲワのアキタに来て交易をするところである。

またガスバル・ヴィレラはこの国をエズと称するという。イグナシオ・モレイラはこれを「アイノモソリ」と称している。このような聞き書きによる断片的な情報から、実体をともなった内容をもりこんだ報告はジロラモ・デ・アンジェリスによってなされた。かれは一六一八年、はじめて蝦夷地にわたりそこでアイヌの人びとにあっている。一六二二年には二度目の渡航をおこなっている。

蝦夷地渡航の報告を二度にわたっておこなっているが、そのなかで、かれはこの人びとの形質的な特徴、宗教、衣服などについて述べ、そしてアイヌ語についても触れている。これは現在のところ、アイヌ語に関する最古の記録となっている。

中国では元代に骨嵬グウエイ、明代に苦夷クイ、清代に庫野クイェなどの呼称でアイヌの人びとの存在が知られて

いた。

こうして、ヨーロッパにおいてその存在を知られるようになるアイヌの人びとであるが、実は日本人の間に知られるようになるのもそんなに古いことではない。もちろん古代におけるえみし(蝦夷)という存在を除けば、えぞ(蝦夷)という呼称でアイヌの人びとが日本人のあいだの知識となつたのは一七世紀も後半、より具体的には新井白石の『蝦夷志』(一七二〇年)、寺島良安『和漢三才図会』(一七二二年)の流布にともなつてのことである。『蝦夷志』はアイヌの人びとを学問的に取り上げた嚆矢であり、その挿図は人物描写に難はあるものの物質文化の描写は現在なお通用する。『和漢三才図会』は挿図にこそ問題があるが、その記述は『蝦夷志』に遜色ないといつていい。

ヨーロッパにおいても日本においてもアイヌの人びとの情報をはじめて得た時期はそれほど懸隔がないというのはおもしろい符合である。

さて、アイヌの人びとは日本でもヨーロッパでも久しいあいだ、えぞもしくはアイノと呼ばれた。アイノは、アイヌ語特有の口を丸めたu音が日本人にはoと聞こえたために生じたことばで、類似にはカムイ Kamuy、カモイ、イナウ Inaw、イナオなどというのがある。欧米では現在でもアイノと記されることがある。また、本来は人間集団に対しての呼称であつたえぞ(蝦夷)が地名としても用いられ、蝦夷地などの呼び方が定着する。ヨーロッパでも地名としてのえぞ(Esso, Yezo など)を古地図などで見出すことがあるし、また、欧米の博物館の資料カードや資料台帳にも「えぞ」の語をみることがある。

ところで、アイヌの人びとである。

アイヌとはかれらのことばで、神に対する「人間」、女に対する「男」、あるいは男の尊称などといった義を有している。転じて民族呼称となった。

前述したように古くえみし(蝦夷)と呼ばれた人びとの中にアイヌの人びとも含まれていたが、異なる言語・文化をもつ人間集団の呼称とされたのがえぞ(蝦夷)であった。一七三九年(元文四)の『北海随筆』には「長者 アイノ」に「夷を通し用ゆ」と注釈しているので、このあたりが民族呼称としてアイノが用いられた初見であろう。最上徳内が著したとされる『渡島筆記』(一八〇八年)に「自称してアキノといふ。何の義たることをしらず。アキノも亦自ら解することなし。これを呼ぶゑぞといへば喜ばず」とあり、これがアイヌがかれらの自称であることを記した最初の記録となる。こののちもかれらがアイヌ、アイノと呼ばれることはなく、もっぱら、蝦夷、土人とよばれ、明治維新後は行政上、旧土人とされた。法律的に旧土人の呼称は、一九九七年に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が施行され「旧土人保護法」の廃止まで残されていた。

アイヌの人びとは狩猟を主たるなりわいとしているが、もちろんそれだけではない。かれらは積極的に交易をおこなっていた人びともある。

かれらは地域的に北海道アイヌ、樺太アイヌ、千島アイヌ、本州アイヌと大別される。北海道アイヌは現在の北海道本島と国後・択捉まで、樺太アイヌは現在のサハリン島北緯五〇度付近まで、

千島は中部のラシヨワ島からシムシユ島まで、本州は津軽半島および下北半島の一部であった。それぞれの居住地を中心に隣接の諸民族と積極的な交易をおこなった。そのためもあって、かれらの文化は複雑な構成をもっている。

基本的には日本列島やシベリアとも共通する文化要素をもちつつ、それらを巧みに取り入れながらも独自の文化発展をみせた。

近年のシベリア諸民族の文化研究の成果——とりわけロシアが蓄積していた膨大な調査記録の公開や現地調査が可能になるなど——はアイヌ文化研究に大きな刺激をもたらした。これまでは日本国内という限られた範囲でアイヌの人びととその文化をながめていたのが、いかに近視眼的であったかを認識するに十分であった。

アイヌ文化はそれ自体で完結した孤立文化ではない。例えばクマ送り儀礼にみるシベリア・北アメリカとの類似性やシャマニズムの存在は古くから指摘されている。さらに千島アイヌのもつコイリング技法のバスケットは北米、カムチャツカなどとの関連が指摘されはじめている。樺太アイヌは北海道アイヌとの関連で文化を論じるのではなく、むしろシベリア諸民族の文化接触を意識した方が理解しやすい状況が生まれてきている。

また、アイヌの代表的な衣服であるアットウシは、素材の上からいえば日本列島の南からの連続性が考えられるし、形態的には本州地域の労働着と関連があり、加飾の上からはシベリア諸民族の技法の影響がある。つまり、衣文化ひとつをとってみてもアイヌ文化は優れて複合的な文化を形成

しているということが出来る。

ユーカラなどの口承文芸についても北方ユーラシアという広い範囲を想定して今一度考えなおしていく必要があるだろう。

かなり古い時代からその存在が知られているアイヌの人びととその文化であるが、実はその文化体については意外に知られていない。たとえば、アイヌの人びとが神祈り儀礼で必ず用いるイクパスイという灌酒器がある。これはアイヌ周辺の諸民族で関連するものがない。唯一、神道に近いものがあるとされるが、確認はできていない。なぜ、アイヌはそのようなものを用いて神に祈りを捧げるのであろう。

アイヌとその文化、また歴史研究は日本の学問世界の中で長く等閑視されてきた。日本は社会的、経済的にアイヌの人びとを差別してきただけではない。学問的にもまた差別し続けているのである。

(佐々木利和)

〈参考文献〉

アイヌ文化保存対策協議会『アイヌ民族誌』第一法規、一九七〇年。

アイヌ民族博物館『アイヌ文化の基礎知識』草風館、一九九三年。

佐々木利和『アイヌの工芸』至文堂、一九九五年。

萩原真子ほか『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館、一九九八年。

いけばな【生花 ikebana】

この風土における插花芸術の総称として「いけばな」の語がそれまでの華道や花道などの語に代わって用いられるようになるのは、第二次大戦後である。「いけばな」という言葉自体は一九三〇年ごろまでに広く一般に定着していたものの、まだ插花芸術のあらゆるジャンルを含むという形では用いられていない。

「いけばな」という言葉のもとになった「いけはな」という語は一七世紀早くの文献に見えるが、これがそれまでの插花芸術の主流であったまっすぐな真まことを立て左右を違えながらもシンメトリ的な世界に帰結する「たてばな」にたいする新様式を示す語として用いられるのは一八世紀に入ってからである。それは新興の抛入花なまひばなが天地人といった役枝を定めて様式的に確立したことの証しであり、生花、插花、活花をはじめとするさまざまな字があてられた。一九世紀前半の生花の教本には「いけばな」という濁音による表記も見られる。いっぽう一七世紀前半に様式を整えた「たてばな」は「りっか」と呼ばれるようになったが、これはずっとのちまで「いけはな」とは区別されたのである。

この「いけばな」という言葉が日本の插花芸術一般をさすようになったのは、とりあえずは江戸